The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ゾラ『獣人』と時の経過 ： 変容する19世紀フランスの表象と心象
Author(s)	高橋, 愛
Citation	Gallia. 2011, 50, p. 151-158
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/9931
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ゾラ『獣人』と時の経過
―― 変容する19世紀フランスの表象と心象 ――

高橋　　愛

19世紀のフランス社会を批判的に検証し、文学作品によって同時代の諸問題に応えたゾラは、1890年に『ルーゴン・マッカール叢書』*Les Rougon-Macquart*（1871－1893）の第十七巻『獣人』*La Bête humaine*[1]を書き、その主たる舞台として駅を選んだ。本稿では、精緻な鉄道世界の描写を残したゾラのこの作品を「時の経過」という私たちが考察すべきテーマの中に位置づけ、歴史的文脈に配慮しつつ検討し、作者の時代意識とそこに示された思索の射程を考察していきたい。

1. 『獣人』における時の特質

『獣人』を「時」の視点から読み直すならば、19世紀における時間の感覚について、最初に大まかに確認する必要があるだろう。

ジャック・アタリが説明するように、「時間の歴史」を探ることは、各々の時代背景や秩序のあり方、変化する社会の予兆までを学ぶことである[2]。七月王制下に本格化し、第二帝政期に大きく展開したフランスの産業革命は、それまでの価値観を次々と打ち壊して、人びとに「時間」への意識変化を促した。産業の発達に伴う大量生産の動きがすべての流れを速め、人は否応なしに、社会的存在として組み込まれるべく、自らを新しいスピードに順応させたのである。「量」として認識され、稼ぐべき金と同等の価値を持つようになった19世紀の「時間」は、フランス人のあらゆる生活領域に影響を及ぼしていった[3]。

当時の社会が求める新しい「時間」を万人に教育する場として、駅が効果的に機能したのは良く知られる。19世紀前半まで町ごとの日時計に従って生きていたフランス人も、鉄道網の拡大で複雑化したダイヤグラムの編成と電気通信システムの発展による時間の照合体系の標準化を確立するために、国内における時刻の統一を求めた[4]。こうして、ナポレオンすらも実現出来なかった標準時の適用は、

1）本稿で使用する『獣人』のテクストは、以下の版による。Émile Zola, *La Bête humaine*, in *Les Rougon-Macquart*, édition intégrale publiée sous la direction d'Armand Lanoux, études, notes et variantes, index établis par Henri Mitterand, 5 vols, Bibliothèque de la Pléiade, Éditions Gallimard, tome IV, 1966. 各引用後の括弧内に頁数を示す。文中の日本語訳は執筆者による。拙訳については、次の既訳を参照させていただいた。エミール・ゾラ『獣人』河内清・倉智恒夫訳、筑摩書房、1981；エミール・ゾラ『獣人』《ゾラ・セレクション》第6巻、寺田光徳訳、藤原書店、2004.

2）Jacques Attali, *Histoires du temps*, Fayard, 1982, p. 248.〔邦訳：ジャック・アタリ『時間の歴史』蔵持不三也訳、原書房、1986.〕

3）福井憲彦『時間と習俗の社会史』新曜社、1981, p. 41.

4）小倉孝誠『19世紀フランス夢と創造』人文書院、1995, pp. 48-50.

1891 年に、首都パリの時刻に従ってフランスで施行されることになる。都市の秩序に纏わる様々な象徴を内包し、「無慈悲な精密機械[5]」としてのイメージを膨らませた駅は、行き交う旅行者や商品の流れを最大限に加速し、時間厳守を徹底した。人びとの生活に画一的な側面を押し付ける普遍的な時間の設置は、各人の私的な経験の独特さも侵食していく[6]。

標準時が設定される一年前に書かれた『獣人』の中で、新しい時間の様相がどのように現出しているのかに注意し、その描写の意味や特質に光をあててみたい。ゾラが登場人物と時の関係を強調するのは珍しいことではない。例えば、叢書第十三巻『ジェルミナール』(1885) の冒頭では、家の鳩時計が四時を打つと同時にカトリーヌ・マユが起床し、炭鉱へ出かける支度をする[7]。彼女の早起は、資本主義勃興の時代に組織化された時間に管理され続ける労働者の日常を象徴し、後に描かれるブルジョワジーの令嬢セシール・グレゴワールの朝寝の様子[8]と比較される。それに対して、『獣人』における時間は、標準時の到来に合わせるように、皆に同等の影響を及ぼす。「強者も弱者も利用[9]」していた当時の鉄道の状況を想起させながら、登場人物は仕事と休息、思索にふける一時に至るまでの行動の一切を列車の時刻表に厳しく規定され、その画一的な「時間」の性質は特筆すべきである。時代の要素をあらゆる面から汲み、物語の中で生かすゾラの創意が、ここでも確かに見出されるのだ。列車が凄まじい速度を獲得して疾駆し、時間に関わる仔細な記述が登場人物のドラマと分かち難く結びつくのを確認するとき、私たちは 1890 年における作家の時代感覚をあらためて知ることになる。

2. 死へ向かう時

ゾラが書簡や「執筆草案」の中で明かすように、本作品は「鉄道世界における或る恐ろしい惨劇、司法界も垣間見ることができるような犯罪の研究[10]」であり、「パリ中に悪夢を与えるような強烈なドラマ[11]」を想像し、執筆された。「列車の機械的な轟音、つまり知的、社会的成果を背景として、神秘的で胸をえぐるようなドラマによって示したいもの、それは感情面における現在の状況、人間の奥底に潜む野蛮さである[12]」と草案に書かれて生まれた小説は、「鉄道」という人類の知

5）Jacques Attali, *Histoires du temps*, *op. cit.*, p. 224.
6）スティーヴン・カーン『時間の文化史』浅野敏夫訳、法政大学出版局、1993, pp. 47-48.
7）Émile Zola, *Germinal*, in *Les Rougon-Macquart*, édition intégrale publiée sous la direction d'Armand Lanoux, études, notes et variantes, index établis par Henri Mitterand, 5 vols, Bibliothèque de la Pléiade, Éditions Gallimard, tome III, 1964, pp. 1143-1144.〔邦訳：エミール・ゾラ『ジェルミナール』上・下巻、河内清訳、中公文庫、1994.〕
8）*Ibid.*, pp. 1199-1200.
9）Pierre Guiral, *La Vie quotidienne en France à l'âge d'or du capitalisme. 1852-1879*, Hachette, 1976, p. 107.〔邦訳：ピエール・ギラール『フランス人の昼と夜　1852－1879』尾崎和郎訳、誠文堂新光社、1984.〕
10）ゾラの次の手紙を参照。Lettre à Jacques Van Santen Kolff, 16 novembre 1888, in Émile Zola, *Correspondance*, édition établie sous la direction de B. H. Bakker et C. Becker, Les presses de l'Université de Montréal, 1987, tome VI, p. 350.
11）Émile Zola, « Ébauche » de *La Bête humaine*, manuscrit conservé à la Bibliothèque nationale de France, N.a.f. 10274, f° 338.
12）*Ibid.*, f° 400.

性の成果をあらわす一方で、人間の奥底に常に潜む野蛮さや獣性を「殺人」という形で抉り出す。そして、登場人物はたえず死へ突き進むのである。

冒頭に目を通すと、物語の最初に登場するのは、アパートの上階から外を眺めているル・アーヴル駅の助役ルーボーである。ゾラの小説における語り手は、舞台となる町の写実的な描写を先ずは忘れずに行うが、『獣人』においても、仕事上のトラブルでパリへ来たルーボーの眼差しは一頻りサン・ラザール駅周辺のパリへと向けられる。ショッピングから一向に戻る気配のない妻セヴリーヌに苛立ちを覚えながら、助役は知り合いのアンリと次のような会話を交わす。

> アンリは愛想良く見せるためにさらに質問を重ねた。
> 「では、パリにお泊りになるのでしょう？」
> いやいや！ふたりとも、晩に六時三十分の急行でル・アーヴルへ戻るのですよ。ええ、確かに休暇だったらねえ！でも、叱責を受けるために出てきただけですから、すぐ家へ帰らなければならないのですよ！[…]
> 三時二十分を示している鳩時計の前で、ルーボーは絶望的な身振りをした。何だってセヴリーヌのやつはこんなに遅くなっているのだ？（p. 999）

社会的な時間を生き、仕事と余暇の境界を理解しているルーボーは、当時の読者の親密な感覚を呼び起こしたに違いない。そして、この時間をめぐる感覚こそ、ゾラが私たちを小説世界へ導く重要な要素となってゆく。セヴリーヌの帰宅後、彼女がグランモラン裁判長の愛人だったことを知るルーボーは、嫉妬から裁判長の殺害を決意するが、そこで計画されたのは六時三十分にパリを発つ急行内での密室殺人であった。妻に手紙を書かせ、裁判長もその列車に乗るように仕向けたあと、彼は発車時刻を待つ。

> 六時十五分になるとすぐに、ヨーロッパ橋から出てきたル・アーヴル行き急行の機関車が列車の方へ送られ、連結された。[…] 六時二十分に、ルーボーとセヴリーヌが姿をあらわした。[…] 乗客の波がプラットホームに沿って進んでおり、彼らもそこに紛れ込んで車両の列を追い、空いている一等のコンパートメントを目で探していた。[…] 大時計は六時二十七分を指し示していた。あと三分ある。駅長と話しながらも、遠くの待合室の出入り口を窺っていたルーボーは突然駅長と別れ、セヴリーヌの傍に戻ってきた。[…] 遅れた乗客がひとり、毛布だけを手にして到着した。[…] それこそ彼〔グランモラン裁判長〕だった。セヴリーヌはがたがた震えて、シートに座り込んだ。[…] 一分後に六時半が告げられる。新聞売りはしつこく夕刊をすすめ、何人かの乗客はまだプラットホームをうろうろして吸いかけの煙草を終えようとしていた。だが、まもなく皆乗り込んだ。[…] 機関士が再び長々と汽笛を鳴らし、絞り弁を開いて、機関車を発車させた。出発したのだ。（pp. 1022-1025）

時間厳守を徹底する駅の様子は分単位で描かれ、列車の連結やプラットホーム上の乗客、喫煙者、新聞売り、機関士などが見せる日常的な風景の中で、ルーボーとセヴリーヌの計画は着々と具体化する[13]。時代が求める迅速さを写実的に観察記述するゾラは、展開する物語のリズムを決定付ける描写を綴り、グランモラン裁判長の殺害がルーボーの予定通りに準備されていることを刻々私たちに伝えるのである。読む者が、再生された駅の現実の時間感覚を思い出しつつ、物語が開示してくる全く別の世界にも立ち会っていることを深く感ずる瞬間といえるだろう。時代の事物に向き合って新鮮さを嗅ぎ取り、内在的な質にまで思い至る作家の感覚が鋭く光っている。

このグランモラン裁判長の殺人が列車の運行に則った厳密なタイムスケジュールに従って決行されるように、その後も登場人物が迎える死の場面では、時の経過が読む者に持続的に示され、小説内の重要なアクセントとして機能していく。次の例を検討してみよう。踏切番の娘であるフロールは、小説の主人公で西部鉄道会社の機関士であるジャック・ランチエの愛情がセヴリーヌに向いたのを知ったときに「手足を引きちぎられた二人の死体」を思い浮かべる「エゴイスティックな復讐心」を覚え、恋人たちの事故死を企図する。列車の脱線による転覆事故を計画し、決行する彼女の一連の動作と心の内は、機関車の通過に合わせて逐一示される。

> 彼女はレールを外すことを思いついたのだった。[…] ついに七時五十五分になり、ミザールの警笛が二回鳴って上り線にル・アーヴル発の普通列車が通過することを知らせたので、彼女は立ち、遮断機を下ろして、旗を握り締めながら前に立った。[…] 立ったままで、彼女は再び時間を計っていた。もし十分後に貨物列車の通る合図が何もなかったら、切通しの向こうのあそこまで走っていき、レールを外すのだ。[…] あと二分、あと一分。彼女は走り出そうとしていた。走り出した。(pp. 1252-1255)

強く意識された時の流れが、やはり分刻みで、フロールの早い鼓動とともに読む者に迫ってくる。ゾラの小説世界において、列車の時刻表に象徴される社会的な時間は、登場人物の死の時刻までも決定し、一瞬一瞬はその枠組みの中で容赦なく過ぎていくのである。この事故によってフロールは多くの乗客の命を奪うこと

13) そして、パリは濃密な黒に浸されていく。駅をとりまく色調の変化は、同じサン・ラザール駅をモチーフとしたモネの絵画的実践を思わせるが、ゾラは草案の段階から、第一章で描く場面を夕方から夜にかけての暗くなる時間帯に設定しており、駅の昼間の様子を好んだ画家とは対照的である。ゾラが描くのは、モネのあらわした現代的な詩情だけではなく、時刻表に合わせてプラットホームへ向かい、列車に乗り込む人の波であり、急行の発車する「六時三十分」という社会的な時間に合わせた犯罪を企て、その集団にまぎれて消えてゆく登場人物ルーボーとセヴリーヌの姿なのである。作家の選んだ配色が、混沌とするその後の小説世界を準備している点については、言を俟たない。絵画的な要素を際立たせつつ、時間の推移を如実に伝えるゾラの小説描写の特質については、拙論の次の箇所を参照されたい。«Zola, des langages picturaux à la description du roman. Son regard sur l'envers de la société», in *Études de langue et littérature françaises*, n°94, 2009, pp. 57-60.

になるが、肝心のジャックとセヴリーヌは生き延びる。絶望し、轢死を決意する彼女が、記憶した列車の運行スケジュールを最後まで反芻するのはきわめて興味深い。「何も急ぐことはない。九時二十五分にパリ発の急行がやっとそこを通過するけれど、その前に列車は通らないのだから。(p.1272)」目指す列車と、つまり「死」と衝突するまで、フロールはトンネルを独りで歩き続け、暗闇の中で経過する時を計り、その生を閉じる。死に忍び寄る登場人物たちに残された最後の時間は、彼らの視線が異様な力で闇を照らす機関車の光と交錯した瞬間に止まるのである。

3. 社会が裁く時

こうした文脈の中で考えるならば、誰もが従う時間の流れを無視することが、社会的な規範からの逸脱と見做される例も当然ながら生まれてくる。物証も乏しいグランモラン裁判長の殺害事件をめぐって捜査は難航し、犯人の検挙につながる唯一の証拠品となった懐中時計に関して、石切工カビュシュに嫌疑がかかる。司法当局のドゥニゼによって取調べを受けるカビュシュは、犯行当時のアリバイを十分に言い表すことが出来ない唯一の人物であることに注目したい。

> 「二月十四日から十五日にかけての夜は何をしたかね」
> 「その夜は六時頃に寝ました […]」
> 「[…] お前の従弟に尋問してみたら、昼頃にお前と別れて、その後は会っていないということしか言えなかったのだ。お前が六時頃に寝たことを証明してみたまえ」
> 「馬鹿な、そんなこと証明できません。森の外れにひとりで住んでいるのです。そこにいましたよ、私がそう言っているのだから、それでもう十分ではないですか。」[…]
> 「私の方から二月十四日の夜にお前がしたことを言ってやろう。お前は三時にバランタンでルーアンへ向かう汽車に乗った。[…] 九時三分にルーアンで止まるパリ発の列車で戻ってくるはずだった。そしてプラットホームの人混みに紛れ、お前は特別室にいるグランモラン氏を目にした。[…] 雑踏に紛れてお前は特別室に乗り込み、マローネイのトンネルに入るのを待ったのだが、時間の計算を間違えた。お前の犯行時に汽車がトンネルを抜けたからだ。そして、死体を投げ落とし、旅行用の毛布も片付けたあと、バランタンで降りた。以上がお前のしたことだ。」(pp. 1100-1103)

このように、社会的な時間の埒外で生きる者は、実生活における時の経過すら公に証明できなくなってしまう。グランモラン裁判長に宛てたセヴリーヌの手紙は司法省の高官カミー＝ラモットに隠滅され、体制の番人であるドゥニゼによって、カビュシュは冤罪を負う。ここで私たちは「司法界も垣間見ることができる鉄道世界の犯罪研究」という小説のテーマに行き着くわけだが、寺田光徳氏が説明す

るように、ドゥニゼは「古典的な理性に支配された意識の世界しか顧慮しない」硬直した体制の中で、「嫉妬」という「真犯人の無意識に根ざす動機」を実質的に見抜けずにカビュシュを検挙した[14]。そして、状況証拠を積み重ねるにあたっては、社会的な価値観として定着した「時間」の常識に照らし、浮かび上がった愚昧な仮定を有力な決め手とするのである。

それでは、グランモラン裁判長殺害の真犯人であるルーボーはどうなったのであろうか。事件後にセヴリーヌとの夫婦関係は破綻を来し、気晴らしと自己忘却を求めて、彼は博打への陰鬱な情熱に身を投じるようになる。その人格の崩壊を描くゾラは、ルーボーの時間に対する意識の欠落を強調していく。

> ルーボーは次第に家を留守にするようになった。[…] 昼勤の週は十時に五分間で食事をし、十一時半になるまで再び姿を現すことはなかった。[…] 今では仕事にも穴をあけるようになった。もうひとりの助役ムーランが彼を一時間も待たなければならなかったことがすでに二回あった。[…] あらゆるルーボーの勤務状態が、このように少しずつ崩壊作用の影響を受けはじめていた。(p. 1215)

分刻みで物事に対処していたかつての鋭い五感の働きを失い、動きの取れない感情に陥ったルーボーは、時間を厳守する習慣を捨て、「一時間」単位の悠長な波に身を委ねる。そのゆっくりと経過する時の中で行われることを、彼に代わって証言できる者はもはや存在しない。ひたひたと押し寄せる崩壊作用を通して、意志の力を失った虚無感が露呈し、ルーボーは社会と乖離していく。抜け殻となった男は破滅への傾斜を一気に転げ落ち、ジャックが犯したセヴリーヌ殺害の罪を着せられて、やがてカビュシュと同じく投獄されるのである。

4. 暴走列車があらわす時

第二帝政期に文明と進歩の象徴であった機関車は、ジャックとともに『獣人』の主人公と言って良い。最終部を準備する第十一章で、ジャックは遺伝的な性向に促され、理性では捉えられないエロスとタナトスの結合から、セヴリーヌを殺してしまう[15]。その主人公の行為を通じて、ゾラは「執筆草案」で構想したことをあらためて解りやすく描き出すのである。

> 「なぜなの？ああ！なぜなのよ？」
> 彼〔ジャック〕は拳を振り下ろした。[…] 突き刺しながら、非常に恐ろしい手の欲求を満たしたくなり、彼は凶器のナイフをひねった。[…] まさにその

14) 寺田光徳「ミステリーとして読む『獣人』」『機』No.154, 2004, p. 19.
15) ジャック・ランチエは『居酒屋』(1877) の主人公ジェルヴェーズ・マッカールの次男で、殺人の狂気に転じるアルコール中毒の遺伝を受け継いでいる。フロイトに先駆けて、エロスとタナトスの結合から無意識へ至る世界を描いてゾラの現代性や先見性については、次の解説を参照のこと。エミール・ゾラ『獣人』寺田光徳訳、前掲書、pp. 519-521.

> 瞬間、パリ発の急行が非常に荒々しく、大変なスピードで通り過ぎたので、床はカタカタと震えた。彼女〔セヴリーヌ〕は、この嵐の中で雷に打たれたように死んでしまっていた。(p.1297)

知的、社会的成果をあらわす「列車の機械的な轟音」を背景として、「人間の奥底に潜む野蛮さ」が明快に示されている。そして、この場面に続く最終章では、情婦フィロメーヌに関わる悋気から、ジャック自身が同僚の機関助士ペクーと走行する機関車上で格闘し、車輪に巻き込まれ、命を落とすのである。人間と機関車は同時に喚き、叫び、破壊と崩壊へ向かう。この結末は、暴走する機関車と獣性を露呈した人間の姿を同時にあらわし、小説の主題と題名の意味を鮮やかに浮かび上がらせるが、最後に描かれる機関車が「屠殺場」と呼ばれるライン戦線へ向かう「肉弾兵」を乗せていることに注目したい。ルネ・ボノーが「死体を大量に撒き散らした作品[16]」と表現する『獣人』では、普仏戦争の兵士たちが最後の死者の山として暗示される。すべてが猛烈な速度で走り去り、計測も不可能となった時の経過が、理性や意志を失った兵士たちと併せて描かれる。

> 今や、全線のあらゆる電信機が鳴り響き、ルーアンとソットヴィルで幽霊列車が通過したという知らせを聞いて、皆の心臓がどきどきと高鳴った。誰もが恐怖で震えた。[…] 列車は赤信号も発雷信号も意に介さず、走行を続けていたのだ。[…] 機関士も乗せず、昏冥へ突き進み、目も見えず、耳も聞こえない獣のようになって死の中に放たれた列車は、すでに疲労で呆然とし、酔いにまかせて歌い続けている肉弾兵を積んで、走り走り、走り続けていた。(p.1331)

列車が駅に止まらず、秩序を保つ上で不可欠な「電信機」や「信号機」、「発雷信号」も機能しない世界では、時は破滅的に流れる。崩壊する世界は、この計りえない時の描写からも表現されているのである。小説内に鏤めた要素を収束しながら、それらを再びゾラが力強く描き切るとき、機関士も進むべき方向も失い、「疲労で呆然」として酔いつぶれた兵士たちを乗せた暴走列車は、第二帝政の終末を象徴して「死の中に放たれる」。それはまさしく、普仏戦争から約二十年を経て作者が再考し、描出した当時のフランスの姿である。ここに至って、私たちは、終行を書くゾラが機関車と人間によって象徴される「獣人」の意味を詳らかにするだけではなく、叢書全体を貫く帝政期への批判的な視座を読者に示して物語を閉じたことを理解する。

結論

以上のように、『獣人』における「時の経過」の問題を概観した。この視点から作品を論じ直すと、小説があらわす複雑な諸相をあらためて照射し、時代の鋭い

16）Renée Bonneau, *La Bête humaine Zola*, Hatier, 1986, p. 47.

読み手であったゾラの特質を再確認することが可能となる。標準時がフランス人に課され、個人の生活が社会の要請する時間に組み込まれる頃、作家は人びとの意識に纏わりつく「時間」の特質を鮮烈に書き表していた。現実はサスペンスやミステリーの要素と結び付き、物語の世界そのものと深く呼応している「死」と合一する。その結果、新しい時代のスピードを保ち、人間の塊を飲み込み吐き出し続ける駅が象徴する世界は、小説でしか得られない特殊な感覚を通して、普段とは違った相の下に、読者の前に立ち現れる。1890 年における「時間」から新しい意味を探り、自らの思考を深化しつつ小説手法の上に成り立たせたゾラは、時の流れを変幻自在なテンポとリズムで表現し、一層の筆の冴えを見せた。その陰影に富む文によって、叙述には振幅や起伏が生まれ、小説を手にした今日の私たちにも無類の読みごたえを与えていると言うことができるだろう。

（武蔵大学非常勤講師）